

仙台・防災フォーラム

ゲームやVR体験し学ぶ

仙台市青葉区の仙台国際センター展示棟などで8日にあった「仙台防災未来フォーラム2025」（市主催）では、地域団体や大学、企業など延べ142団体が東日本大震災を教訓にした体験活動やブース展示、事例発表を通してそれぞれの取り組みを紹介した。

（3面に関連記事）

142団体、取り組み紹介

NPO法人「FORYO Uにこにこの家（太白区）」は自宅や学校、集会所が描かれた架空の町の地図を使用。参加者が住民になりきって災害への備えを学ぶ仙台発祥のボードゲーム「そなえゲーム」の体験ワークショップを開いた。

ゲームは「災害時にあつたらいい物」「自分ができたらいい活動」などの内容が書かれたカードを地図上のふさわしい場所に置いていく。参加した東京都の中等教育学校4年の山田奏帆さん（16）は「自分の住む地域を知らないことに改めて

気づいた。災害を自分ごととして考え、地域活動に参加したい」と話した。

東北福祉大は、防災減災学習ができるVR（仮想現実）ゴーグルをブース展示。大学生が扮した5人組の「防災レンジャー」が、地震発生時に乗っていたエレベーターからの脱出、車いす利用者の階段避難のさせ方などを動画で説明した。

生涯学習ボランティア支援課の佐藤克文課長は「VRは臨場感たつぷりで、自分が実際に経験したような気分になる。いざという時の動き方を覚えてもらい、

災害発生時 慌てず行動を



防災教育の「仙台そなえゲーム」を体験する来場者

災害時に慌てずに行動してほしい」と話した。

藤崎はインバウンド（訪

多文化防災がテーマの発表では、外国語版のハザードマップの作成状況に関し、河北新報の中沢昂大記者（24）が東北の全77市を調査した記事を紹介。人手や予算の課題を理由に、自治体で外国人向けの防災対策が進んでいない現状を説明と話した。

日客）増加を受け、外国人向けの防災訓練の様子を報告した。根本雄二総務部長は「言葉や文化の違いを踏まえ、避難の伝え方を工夫する必要があると気づいた。外国人の方も安心できるよう訓練を続けていく」と話した。